

“親離れ” “子離れ” をめぐる断章

吉田清彦

もうずっと以前に“鍵っ子”が問題になった。数年前、“母原病”が話題になった。ここ数年マスコミを賑わせているのが“家庭内暴力”であり“母子密着”であり“父親の権威復活”の声である。

それとともに“家庭崩壊の危機”が叫ばれ、その主な原因が女性の職場進出（働く女性の増加）にあるかのような主張も多くみられる。その端的な例が、中曽根内閣の「家庭基盤の充実」政策である。この政策には、社会の矛盾や福祉政策の貧困を全て女の肩に背負わせるために女を再び「家」に閉じこめ、あわよくば戦前の家父長制の復権をはかろうという意図がありありと読みとれる。

しかしいくら「女よ家庭に戻れ」と叫ぼうと、“父権”の復活を呼びかけようと、時代逆行的な精神論によっては現実に着実に進行している“家庭崩壊現象”を防ぎえようはずもない。“家庭崩壊”は女性の職場進出によってではなく、学歴社会、管理社会、あるいは男社会の歪みとして立ち現れてきたと言うのがより正確であろう。そうであるなら“崩壊”をとどめるためには、学校や企業における管理や競争に対して立ち向かう、あるいはそこから意図的に抜け出すことの方が先決で

ある。

さらに言うならば、マスコミが安易に使用するこの“崩壊”という表現はたして適切な言葉なのであろうか。一つの価値感から見ればそれはたしかに“崩壊”であろうが、違った視点から見ればそれは単なる“変容”ではない。“崩れゆく”のではなく、“変わりゆく”のである。ここに一つの価値観を入れれば、「新しい可能性に向かってさまざまな変容（多様化）しつつある家庭」という表現こそが適切となる。

人間関係が縦に繋がる従来の家族観に内在する歪みに対してまず子ども達が（家庭内暴力や非行という形で）反抗の狼煙を揚げ、そして女達が（中高年の離婚という形で）抵抗の姿勢を見せはじめたというのが「家庭」を取り巻く現実であるならば、今私達に求められているのは、人間関係が横に結び付く新しい家庭の創造であらう。

◇

“親離れ・子離れ”（すなわち親の自立・子の自立）ということを考える時、日本の母親と子どもの関係ほど傍目に嫌らしいものはない。いわゆる母子密着が社会的“事件”としてはじめたマスコミに登場したのは、一九

六〇年代後半の東大闘争における“キャラメルママ”であらう。「大学解体」「造反右理」のシュプレヒ・コールやジグザグデモの渦巻く東大駒場キャンパスで母親達は着物姿で「そんな恐ろしいことはやめてちょうだい。やさしい昔の息子に戻ってちょうだい」とキャラメルを配り「夕焼け子焼け」をコーラスした。当時の心優しい息子達は後ろ髪を引かれる想いでそれでも「とめてくれるなオッカサン」と母親達の眼前を駆け抜けたが、今や大学の入学式・卒業式はおろか、会社の入社式に母親同伴というのは常識、巷には新婚旅行に母親同伴というあっぱれな息子達も出現している。

◇

「子どもに注ぐ親の（無償の）愛情」というのは母親にとってはハートのエース、オールマイティーな切り札、今風に言えばおそれおおくも「この紋所が目にはいらぬか」の印籠にも等しいが、当の子どもにとっては有難迷惑な押しつけにしかすぎないことは、その親達が自分が子どもだった時を少しでも思い起してもらえばすぐにでもわかりそうなものであるはずなのだが。まことに親というものは勝手な存在である。

「親になって（子どもを持って）みてはじめてわかる親のありがたさ」という言葉をよく聞か、これなども「親」というものの勝手さ（エゴイズム）まるだしの言葉である。子どもの「立場」を暗に拒絶するだけでなく、

昔自分が「子ども」であつたという、自分の心の中の過去をすら自ずから汚し消すことに繋がることに気づかないのだろうか。

◇

ところで、そういう親は自分の子どもに対する愛情を「無私」「無償」のものと信じて疑いもしないだろうが、日本の親の子どもに対する愛情などというものは、つまるところ「自己愛」に他ならない。子どもを一個の独立した人格として認め、その子どもに対して一個の独立した人格として親が立ち向かうという姿勢が見事に欠落している。そうでなければ、特殊日本の現象として知られる（ヨーロッパではその言葉すらないといわれる）「親子心中」というものの説明がつけられない。「愛する」という行為はもと「自己愛」としての要素を多分に持っている、たとえば男と女の「愛」においても、相手そのものではなく、自分が勝手につくりあげた「イメージとしての相手」像を愛するという陥穽に多く落ちがちだが、子どもに対する親の「愛情」においてはその度合はさらに強く、子どもそのものではなく、自分が勝手につくりあげたイメージを愛している場合がほとんどであると言ってもよいだろう。現実の子どもと、イメージとしての子どもとの間にズレが生じた場合、そういう親はイメージを修正して子供の現実に近寄るのではなく、現実の子どもを見ようともせずイメージの枠の中に無理に押しこめようとする。男と女の間なら

ここで「愛」は齟齬を生じはじめ、途中で両者が歩み寄らなければつまるころ別離あるいは離婚という形で破局を迎えるわけだが、悲しいかな親子の場合はそういうことは認められずに子どもが一方的に歪められていくか、あるいは親が子どもに金属バットで撲り殺されるかのどちらかではない。

◇

自己愛の延長で子どもを愛するということは、自分しか見えてなくて、対象である子どもは結局のところ見えていないということである。子どもが「かわいい」というのは、実は自分がかわいいだけのことすぎない。したがって何らかの理由で自分を見失った時当然子どももその道連れにされる。「親子心中」というのはそういうことである。私は自殺（自死）というのは、それもひとつの生き方だと思っているので、自殺そのものを非難する気は毛頭ないが、自殺と「心中」とは全く事情を異にする。たとえば親に死ぬ理由があつても、だからといって子どもが死ななければならぬ理由はない。人間にはみずから死を選ぶ権利は認められても、どんな理由であれ人を殺す資格などあるはずがない。つまるところ「親子心中」は親の子殺し＝殺人以外の何ものでもない。「子どもをひとりあとに残すのは不憫」などというのは殺人の理由として許されるはずもない。もし本当に「不憫」と思うなら親は死ぬのを諦めて、共に生きることに耐えるべきである。

◇

「過保護」という言葉がある。これは子どもから見れば「過干渉」という言葉と同義である。最近親が子どもに向かってよく使う言葉のベストスリーは、「早く早く」、「頑張て」、「勉強して」の三語であるという。なぜ親はかくも過剰に子どもに期待し、尻を叩くのであろうか。それは学歴社会という現実社会のなかで、「我が子だけは落伍者になつてほしくない」という親の「愛情」である。うが、その時子どもに向かって「あなたのためを思って（かくもうるさく）言うのよ」という台詞が必ず食つ付けられるが、これほど嫌みで都合勝手な言葉はない。本当は子どものためというより、世間に対する親の体面や見栄というものがより多く意識されているのではないだろうか。日経文化教室（東京・新宿・伊勢丹会館）で「親業セミナー」を担当する親業訓練協会理事長近藤千恵さんの指摘「子供の通う『学校』や『成績』をぶら下げるのがステータスシンボル（地位の象徴）と親は感じ」ている（日本経済新聞一九八二年八月一九日付夕刊）という指摘に自信を持つて反論できる親がはたして何人いるだろうか。親に一定の価値感があるように、子どもには子供の、親とは異なる価値感や未来があるはずである。親は自分の価値感を正しいと思えば、自分の（親自身の）現在の生活の中でその価値感を成就するべく努力をすればいいのであって、それを子どもの未来の中に期

待するというのは、おかど違いもはなはだし
い。親の成し得なかった「夢」を子どもに仮
託するというのも、子どもにとってははなは
だ有難迷惑な話である。親が成し得なかつた
ことを、いわんやそれを自分自身現在放棄し
ていることを、子どもに肩代わりして押しつ
けようというのは虫が良すぎるのではないか。
親がまだ人生の「現役中」であるのなら、今
からでも決して遅くはない、親自身の今から
の人生の中で自分で頑張ればよいことであつ
て、本来子どもには全く関係のないことであ
る。子どもは親の「持ち物」ではない。親が
子どもにできることといえ、子どもが自分
の価値感や未来を自分で作り上げていくこと
に対して手を借すくらいでしかない。そして
それには、親が親自身の人生を一生懸命生き
るという姿を見せることこそ一番大切なので
はないだろうか。

◇

昔一時期「ぬけがら(抜け殻)ママ」という
言葉がよく使われたが、今では「空の巣症候
群」(エンブテイー・ネスト・シンドローム)
と呼ぶのだそう(な)なんでもかんでも「病氣」
にしてしまわないと安心できないのは現代人
の悪い癖で、これも一種の「ビョーキ」だと思
うが)。いづれにしても、子育てが終わった
あとの母親の状態を示す言葉である。「無私」に
なって子育てに没頭すればするほど、子育て
が終ってみると(子供が手を離れるというよ
り、成長した子供に去られてしまうと)、後

には何も残っていない自分、空っぽの自分を
発見して、「一体私は何のために生きてきた
のか」という一種の虚脱感に襲われる状態を
指して言う。まさに「抜け殻」である。昔は子
供が何人もいて一番下の子どもの子育てを終
ると五十代にさしかかっている余命もあとわ
ずかばかりで諦めもついていたが、今や女性のラ
イフサイクルも大きく変わって、三十代で下
の子の手も離れて、気がつけば人生はあと三
十年以上も有り余るほどに残されている。そ
ういうことに気づいた母親はできるだけ「子
離れ」を後に延ばすことを企てる。その結果
子どもは「マッチを擦ったことがないので、
ガスコンロが使えない、押し入れだんすにテ
レビを載せてつぶしてしまう、冷凍庫のない
冷蔵庫にアイスクリームを入れて、溶けてし
まった」といった文句を言いに来る。大学生
が輩出することになる(神戸新聞一九八三年
三月一六日)

一方では、こういう愚かな子どもばかりで
はないので、子どものほうから一方的に親離
れされはじめると、母親は今やりの「くれ
ない族」とあいなる。どちらにしても母親に
とっては(もちろん子どもにとっても)全く
哀れな話ではないか。いづれにしても親の子
どもに対する「無償」の愛情などという「錦
の御旗」はもはや風穴だらけで、何の威光も
示さないばかりか、持つだに重たい代物に変
わり果てていることを親はもう気づくべきで
ある。

◇

私が子どもだった頃のことを少しだけ書い
ておこう。私の母親が私に対して口にする最
後の切り札は「私がお腹を痛めて産み育てて
きたんだから、お前のことはお前以上にわか
るんだよ」。いかにも世の母親の誰もが使い
そうな言葉である。当時の私はこの言葉に対
して論理的に反論するすべを持たなかったが、
この言葉を聞くたびに私は母親は味方ではな
く敵だとする感情を確実に膨らませていった。
たしかにもっと小さい時は、母親は私のこ
とを私以上に全てわかっていたかも知れない。
しかし私が母親に口答えをしたり意に添わぬ
言動をして、母親がその切り札を口にし
なければならなくなるということは、とりも
なおさず母親にはわかりかねる何かが私の中
に生まれはじめたということであるはずで、
母親のその言葉ははじめから自家撞着してい
るのである。

今で言えば私の中に「自立」意識(自意識)
のかけらが生じはじめた頃である。親という
ものはどうして子どものそういうところに気
づかないのだろうか、あるいは気づかぬふり
をしていたがるのだろうか。

児童文学者の片岡輝氏の言葉をここで引用
しておこう。

「子どもたちが嫌うのは、親子という血のつ
ながりを錦の御旗として振りかざして、あた
かもそれが当然の権利のような顔をして、子
どもたちの生活や心の中にずかずかと土足で

踏み込む親の無神経さなのだ」「子どもたちは、親のくどくどした小言や、うるさい干渉にうんざりしている」「最近発表になった総理府の調査」では「十二歳から十七歳までの子どもたちの二人に一人が、親に暴力を振るいたいという衝動に駆られたことがあるといい、その傾向はなんと男子よりも女子の方に強いという」(いずれも神戸新聞一九八二年七月二十七日)

私は幸か不幸か非行や親殺しというところまではいかなかったが、部屋中の机の曳出しの中身をぶち撒けたり、学校に行っても授業は受けないという事は何度も繰り返していた。現今のような、火に油を注いで回るようなマスコミの騒ぎ方が当時もあったならば、私も親殺しや校内暴力にたやすく煽られていく芽を間違いないと持っていたといえる。

◇
私の母親は私が小さい時からずっと働いていたので、私はいわゆる「共稼ぎ」家庭(當時は「共働き」という言葉はまだ使われていなかった)の子どもとして育った。当時は村の学校の母親たちは当然のこととして田畑で汗を流して働いていたし、敗戦後十年を経るか経ないかの時代では街の学校の母親たちも私の母親と同様に何らかの形で働くことを余儀なくされていた筈であっただろうが、そんな事情にかかわりなく「母親は家で子どもを育てるもの」という道徳の中で育ててきた私の母親は自分が働くことについて常に負い目

の感情を抱き続けていた。子どもに対しても、親類縁者に対しても。そしてそれは「女房を働かせる」「ふがいない」「夫」に対する恨みの感情と背中合わせのものに違いないと思われるが、いずれにしても、母親や世間に対する私の反抗の言動を、すべて自分が働くことへの負い目に結びつけていった。「お前が『悪い子』になっていくのも、すべて私が働いていて、お前を存分にかまっていられないからだ」と。人に批判されると、全て自分の責任にして「全て私が悪うございました」と自分を責めることで批判そのものをチャラにするのは日本人の悪い癖であり、これは実のところたちの悪い居直りにすぎない。私はここでも母親への嫌悪の感情を募らせていった。たしかに学校から帰って家に誰もいないことは、子どもにとっては寂しいことかも知れないが、そんなことは要するに慣れの問題であり、誰もいないならいらないなりに子どもはそれに合った遊びや生き方を見つけていくものである。問題は母親が実際働いていながら、その働いている自分を否定し、そしてそれをどこかで世間や夫(私にとっては父親)のせいにしてしまうという姿である。あの時、母親が自分が働くということにもっと自信を持って、堂々と自分の人生を主張していたら、私の母親に対する感情は随分違ったものになっていただろう。

文芸評論家の巖谷大四氏は、吉川英治氏の「子供だから分かるまい」という共通な多

寡のくくり方は、たいがい大人たちの滑稽な浅見か、親馬鹿のひとりぎめと云ってよい」(「忘れ残りの記」という言葉を引きながら、「親の、大人の言動が子供を汚染する」と指摘している(日本経済新聞一九八二年四月一七日夕刊)。先ほどの片岡輝氏も「子どもは、私達が考える以上に鋭く真実を見抜いているし、また想像以上にやさしくもある」と述べている。

子どもは自分では案外に早くから「大人意識(大人と対等な自己を主張しはじめる)」を持つものである。そうであるなら、親は子どもに対して早くから「共に生きる」「共に歩む」という意識、あえて言えば「連帯感」をこそ持つべきであろう。

◇
女優の馬淵晴子さんが子ども調査研究所員斎藤次郎氏との対談(「朝日ジャーナル」一九八三年九月二日号)のなかで戸塚ヨットスクールの問題に触れて「あそこに子どもを入れた親は、自分から子どもを牢獄に閉じ込めたわけで、そういう親は子どもに恨まれて殺されたって当たり前だ」と発言している。こんなにはっきりと子どもの立場に立って物の言える大人は少ないと思う。同じ対談の中で、次のようにも発言している。

「親自身、自分がどう生きようとしているのかをはっきりさせない限り、子どもの指導なんて無理だと思うし、教師の場合もそうだろうと思う」

「肝心なのは、その親がどのように生きているかということであって、子ども自身が親の生き方を自分で確かめながら一緒に生きていくことが出来れば、共感するだろうし敬意も払うでしょう」

◇

いったいに子どもは何歳くらいから「親離れ」していくものだろうか。

俵萌子さんの「もう一つの人生」(海竜社)という本の中に「子育て十年、子別れ十年」という章がある。そこでは子どもが次第にそして確実に「親離れ」していくさまがドラマティックに描かれている。

私も私自身の子どもの頃の体験から、子どもは十歳くらいから「子ども扱い」を嫌い、意識的に「親離れ」をはじめと思う。十歳、小学校四年生。私はその頃、親に対するさまざまな不満を、「僕が大人になったら、自分の子どもに対してこういうことは決してすまい、こういうことをしてやろう」と、すべきこと、すべきでないことの一つ一つを克明に心のノートに書き込んでいっていた。これはもう三十五年も前の頃のことであるから、今の子どもは実際にはもっと早くに「親離れ」を自覚しはじめるはずである。六歳、小学校入学期くらいからであろうか。子どもが「親離れ」を自覚しはじめたら、親はもう決して子どもを「子ども扱い」してはいけない。一個の人格として認めて、対等につきあって行くべきである。

ところで親は、子どもが六歳になってはじめて「子別れ」をし始めればいいのかというところもろんな器用なことが出来るはずがない。すでにそれよりも以前に「子別れ」の心の準備ができていなければならない。動物の世界で言う「愛着と排除の巧みな使いわけ」(河合雅雄京大霊長類研究所教授・神戸新聞一九八三年一月一日)である。

◇

川名紀美さんの「密室の母と子」(潮出版社)の中に、思春期専門の治療病棟を日本で最初に設立された福岡教育大学の森崇教授の「四歳を過ぎてからの保護は、すべて過保護であり、過干渉だ」という世の母親にとってあまりにもショッキングな言葉が紹介されている。「過保護、過干渉というのは、結局子どもの主体性を無視するということなので、四歳までに生理的なしつけをきちんと終え、あとは、子どもを信頼して、すべて自分で決めたり行動させてやること」「子どもが何かしようとする、つい口や手を出してしまう。それが過保護であり、過干渉なのだ」「過保護は不信の裏返し。子どもを信じていないから、手を出さずにいられないのだ」と言葉は続く。「母親との癒着が強すぎて、思春期の自立に失敗した」(川名)多くの子どもたちと直かに接している人の発言だけに非常に説得力のある言葉といえる。

子どもの立場に立って同じようなことを指摘する人は多い。

「効果の上がらない、くり返しの注意や小言は、親の自己満足以外の何ものでもない」(グルーブダイナミックス研究所所長柳原彬氏・日本経済新聞一九八三年一月二七日)

「現代は注意過剰時代だ」「わがままで泣いているならほっておけばよい」「節度を自分自身で培う自由を与えるべきだ」(「神戸心療親子研究室」主宰伊藤友宣氏・神戸新聞一九八三年八月二〇日)

「子どものため」の愛情も過ぎると、子どもが自分で育っていくとする芽を摘みとってしまう愚を犯す。でも子どもにはこれがない、子どもにはわからない、と当の子どものさしおいてうんぬんするゴーマンさは、とかく善意の人にはみえにくい」(フリーライター田中美津さん・神戸新聞一九八三年四月二日)

◇

日本の母親が欧米の人達から見ると異常とも思えるほどに「子離れ」しにくい原因に関して面白い報告がある。少し長いが引用してみよう。

「米国のある学者が、生後百日の日米両国の赤ちゃんについて『夜、だれと一緒に寝ているか』比較調査をしたことがある。その結果、日本の赤ちゃんはほとんどが親と一緒に寝かされていたのに対し、米国は別の部屋で一人で寝かされていることが明らかにあった。この背景には、両国の文化の違いがある。

日本の場合、子は授かりものととらえられる。だから母親は、赤ちゃんを初めて出会ったときから、一生懸命に緊密な母子関係をつくらうと努力する。

これに対し米国の母親は、赤ちゃんとはおなかの中で十カ月も付き合ってきたんだ、という実感からスタートする。従って、やっと生まれたのだから、後は自分一人で生きていくべきだとして、早くから自立を願うことになる。」

「日本では親と子はいつまでも気持ちの上で一体であり、そのために時として厳しさ、けじめといったものが薄れがち。この点、米国では早くから「子離れ」「親離れ」が進んでいる」

(兵庫県家庭問題研究所設立記念講演会における同所所長増田光吉氏の講演・神戸新聞一九八四年六月二十九日)

「緊密な母子関係」が、文化、などというのは男が勝手に作りあげた神話であり、実際は、子育てや家事の全てを女にだけ押しつけ、女を家に閉じ込めることにより女の自立をさまたげてきた男の歴史こそがその背後にあることに気づこうとしないのは増田氏の視点の致命的な所であるが、とりあえずこの報告から、「親離れ」「子離れ」のスタート地点が子どもの生後すぐのところにある、ということが結論づけられよう。

◇ 最後にもう一度私自身のことについて語っ

ておこう。

三十九歳、結婚・離婚の経験はあるが、子どもはいない。と書くと、それだけで「だから子どものことについて語る資格はない」とさも不快そうにいう「大人」達の声が聞こえてきそうである。「資格」とはいったい何なのだろう。自分に子どもがある、というだけで子どものことについてあれこれ語る「資格」があるというのだろうか。それに「大人の尊大」というものである。子どものことを語る資格が本来にあるのは、当の子どもだけなのではないだろうか。それなら私にも大いに「資格」はある。三十九年間も「子ども」を続けていたのだから。

私は小さい時から自分の親が厭だった。親の「子ども」であることがたまらなく厭だった。そして親を含む「大人」全てが厭だった。いまも基本的にその気持ちに変わりはなく、私が自分の子どもを結局は持たなかったのは、おそらく自分が親になることの嫌悪感、あるいは不信感(過去の自分への裏切り)が潜在的にあったからだろうと思う。こんなことを言うとはやりのモラトリアムだと言う人がいるかも知れないが、子どもを持たないという選択があってもいいと思う。

ところで私は子どもが大好きである。学生時代から近所の子ども達と何時間でも遊んだし、私の部屋は子ども達の遊び場でもあった。まだ体力に自信のある頃は保父になろうと本気で考えたりもした。だが、これと、自分の

子どもを持つ、ということとは別問題である。

高校生の頃、芥川龍之介の「河童」という作品を読んで強く感動した記憶がある。妊娠した母河童の子宮口に向かって父河童が「子河童」に対して「生まれたいか、生まれたくないか」を問いかけるのである。その結果、「子河童」は「生まれたくない」ことを選択するのである。子どもに対する親の勝手な選択(と、その延長としての勝手な「子育て」)とに対する痛烈な批判がこめられている。

子どもと親との関係を一種の契約関係として捉え、子どもが未成年から成人に達する時点で、子どもに親を(親として認めるかどうか)選択させる、というか、改めて(親子関係を続けるかどうか)選択させる、というような発想があってもいいと思う。(イギリスにおける親子関係の土台として、こういう思想(契約としての親子関係)があると漏れ聞いたことがあるのだが。)

◇

日本生命財団主催のシンポジウム「親と子の絆」の中で、中根千枝・東大東洋文化研究所教授は「大家族の中から非行児は出ない」と報告している(神戸新聞一九八二年一月三〇日)。同じシンポジウムの中で、スタンバック・仏国立教育研究所特殊教育部長は「(二歳以下の幼児も)親だけでなく、子供同士接触を通じて人間関係の基礎づくりを始めていて」「この時期、親は子供に対し命令してはならず、同時に、後ろ向きの態度をと

るのも厳に慎むべき」と述べ、蜂屋慶、京大教育学部教授も「(親離れ・自立するという)切断の時機を見誤ると、親と子の絆は崩壊する」と警告している。

要するに、親が子どもに対して「自分の子ども」意識を早く捨てなければ、子どもは振れはじめ、昔のように子どもは遊ばせるだけ早くから、子ども同士の集団の中で遊ばせる(生活させる)べきである。そのためには団地などの近隣社会においても、子ども同士が相互自由に入出りできる近隣コミュニケーションを親同士が共同してつくり出すというのも一つの方法であろう。

◇

干刈あがたの小説「ウホッホ探検隊」(福武書店)は、離婚後の母子・父子関係を生きた描きあげた、ほのぼのと心温まる作品である。離婚という(子どもにとっては)不幸な現実にもかわらず、とまどう親達を尻目に(十歳と十二歳の)子どもたちはのびやかに、そしてしなやかに生きている。ここには(離婚というものを契機にした)新しい親子関係の雛型がある。作中にも出てくる「子どもが書いた離婚の本」(エリック・ローフス編、円より子訳、コンパニオン出版)とあわせて、子どもを持つ親達にぜひ読んでもらいたい本である。

親離れ・子離れのためには、まず親達が、自分らしい生き方(一人の人間として自信の持てる生き方)個の自立)を成し遂げる努力

をし、その中で子どもたちと共に生きる、共に成長する視点こそが必要であろう。

◇

親が年老いてくると、今後は扶養・介護の問題がでてくる。自立した生き方をしてこなかった親ほど、自分の子ども達(及びその「嫁」)にそれを期待するが、現在の「子ども達」(すでに核家族を形成して「所帯」を持ち生活をしている「子ども達」)にそれを期待するのは無理というものである。「親」の扶養・介護の「犠牲」となり、崩壊していく家庭や押しひしがれている女達をあまりにも多く見すぎてきた。人は誰も、たとえそれが「自分の」子どもであっても(まして「他人」の「嫁」に対して)犠牲や忍従を強制する権利はない。自分の「子ども」達に「世話」にならなくてもいいような人間関係を「大人」達は「大人」達同士で新たに創り上げていくところ。それが今要求されているのではないだろうか。人はいずれ年老いて倒れていくものである。そうであるならば、年老いて倒れる前に、お互いに助け合い、支え合えるようなコミュニケーション「シヨン」コミュニケーションを、会社や家庭の外にこそ前もって準備しておかなければならない。人生が暮れはじめる前に、まだ陽光が光を陰らせる前に、薄闇の中でもたくましく生き伸びていけるような生き方を自力で築きあげていくべきである。